

鈴木 規夫 Ph. D. (Norio001@nifty.com)

統合的変容のための実践 (Integral Transformative Practice) :
トランスパーソナル思想の統合的実践のための理論的枠組

概要

トランスパーソナル研究は、これまでの歴史のなかで、その基本的な「ありかた」(orientation)を段階的に発展させてきたが、その過程のなかで、必然的に、この研究領域における重要主題である実践というものについての認識を変化させてきた。とりわけ、現在の「インテグラル段階」においては、実践についての認識は、これまでの段階におけるものにくらべて、飛躍的に深化している。それは、人間の体験するすべての領域を包括的に統合したうえで、真に持続的な変容を志向する統合的変容のための実践と形容することができるものである。この論文では、トランスパーソナル研究のこれまでの段階的発展の歴史を俯瞰しながら、こうした統合的変容のための実践の特徴、そして、その今後の展開への可能性について検討する。

統合的変容のための実践 (Integral Transformative Practice) :
 トランスパーソナル思想の統合的実践のための理論的枠組
 鈴木 規夫 Ph. D. (Norio001@nifty.com)

人間の高次の可能性を探求するところみとして、トランスパーソナル研究が1960年代に確立されてから、すでに40年の時間が経過しようとしている。¹ その間、トランスパーソナル研究も、あらゆる有機的な人間の営為がそうであるように、その基本的な「ありかた」(orientation)を段階的に発展させてきている(Rothberg, 1999)。トランスパーソナルというところみが、意識の深層に潜在する高次の可能性を実現しようとする「垂直的」な方向性のみならず、同時代を共有する生命を慈愛のなかに抱擁しようとする「水平的」な方向性を内包するところみであることを考慮すると、1960年代以降、人間の生存状況(life conditions)が劇的に変化するなかで、このトランスパーソナル研究が、そのありかたを変化させてきたことは当然のことであるといえるだろう。

いうまでもなく、トランスパーソナル研究は、実際の人間の癒しに建設的に携えることを意図するところみである。このことは、必然的に、トランスパーソナル研究が、癒しの源泉となる「体験」を効果的に醸成(経験・解釈・統合)することを可能とする「実践」(practice)について、建設的・実用的な洞察を提供する責任を負っていることを意味する。

実践とは、常に、個人的な要素と集合的な要素を併せもつ営みである。それらの要素は、相互に関連しながら、「意識の変容」(transformation of consciousness)という窮極の「癒し」を実現するために必要とされる主要な活動領域に生命をあたえる。そこでは、個人の実践は、常に、そのひとの個人的な課題に対する取り組むとしてだけでなく、同時代を共有する人間の集合的な癒しへの取り組みとしての意義をもつことになる。つまり、個人の実践は——本人が意識するしないにかかわらず——現在という瞬間を共有する集合としての人類による、そこに存在する課題への対応としての意義をもつのである。その意味で、実践というものについて考察する際、個人の実践に集合的な意義をあたえる時代性という文脈の重要性を認識することが重要になる。

トランスパーソナル研究は、これまで、人間存在の構成要素(Body・Mind・Soul・Spirit)を包括的に認識する、統合的な視野から実践についての研究をしてきた。そして、そうした研究は、必然的に、刻々と変化する人間の生存状況の要求に建設的に対応するための智慧を創出することを同時代への責任として受けとめるなかで、段階的に発展させてきた研究領域としての基本的な「ありかた」の変化を反映するものである。その意味で、実践というトランスパーソナル研究における「要素」を真に理解することができるためには、トランスパーソナル研究の全体的なありかたを把握する必要があるといえるだろう。実践についての議論にはいるまえに、まず、その背景を構成するトランスパーソナル研究の全体的なありかたの歴史的な変遷を簡潔にまとめておきたい。

トランスパーソナル思想の発展段階

ドナルド・ロスバーク (1999) は、これまでのトランスパーソナル思想の歴史を3つの段階に区分けしている。第1段階は、化学物質等の使用による意識拡張を強調した段階。第2段階は、集中的・継続的な実践による意識変容を実践した段階。そして、今日、統合的段階といわれる第3段階がはじまろうとしている、という。²

第1段階

トランスパーソナル研究は、まず、トランスパーソナル体験の「状態」(state)としての側面に注目をして、その研究活動を展開した。「状態」とは、普通、幸福感に満たされた一時的な高揚状態として経験されるもので、こうした体験は、日常の意識状態において知覚されるものとは質的に異なる現実へとわれわれの認識を拡張してくれる。そして、トランスパーソナル研究は、こうした意識状態が、意識の深化のプロセスをひきおこす「触媒」(catalyst)として、人間の発達に重要な意味をもつことを証明した。

しかし、こうした意識状態は、持続性をもたない体験である。しばらくのあいだ高揚状態が継続したあと、いずれは終息するのである。また、こうした意識状態は、意図的に醸成しにくい体験である。経験者がしばしば言うように、それは、ある瞬間に突然に訪れる体験なのである。それゆえに、こうした高揚状態が終息したあと、日常的な意識状態がもどるとき、われわれは、「状態」のなかで経験された幸福感が自らのなかに持続していないことに、また、それを自らのなかに蘇生することができないことに失望するのである。

いずれにしても、こうした「状態」としてのトランスパーソナル体験への注目は、どうしても、それを日常の意識状態と対極化されたものとして聖化する傾向を生みだす。そして、それは、結果として、そうした「状態」を経験することそのものを目的化させる傾向を生みだすことになる。また、これは、刹那的な「状態」を、自らの個人としての存在を増幅するために獲得されるべき「対象物」としてみなす「物質主義」(spiritual materialism)の温床となる危険性を内包していた (Trungpa, 1973)。

さらに、この時期に合州国では、LSDをはじめとする、人間の意識状態を劇的に変容させる化学物質 (mind-altering substance) が蔓延しており、トランスパーソナル・コミュニティにおいても、「状態」としてのトランスパーソナル体験を醸成するための方法として、こうした物質を積極的に活用した。しかし、こうした物質の服用により醸成される体験が効果的に経験・解釈・統合されるためには、適切な内的・外的な条件を必要とされる (例えば、内的な条件としては、体験者のこころがまえ、そして、外的な条件としては、体験を解釈するための思想体系) (Cortright, 1997)。そうした条件が存在しないところでは、効果的な経験・解釈・統合は、きわめて困難となる危険性がある。トランスパーソナル研究の「状態」としてのトランスパーソナル体験への注目は、そうした条件の重要性の認知という課題を克服するために、必ずしも建設的な貢献をするものではなかったのである。

第2段階

多数の発達心理学の調査が証明するように、人間において、持続性のある心理的成長は、実際には数年の時間をかけて起こるものである。例えば、Suzanne Cook-Greuter (1999/2000) の調査によれば、ある段階からつぎの段階への構造的成長が完遂するためには、少なくとも5年間の時間が必要とされるという。一時的な意識の高揚状態は、われわれに、自らのなかに存在する可能性を垣間見せてくれるが、そうした体験そのものは厳密な意味において成長といえるものではない。

構造的な成長は、超越と継承 (transcend & include) という法則に則りながら、進展していくプロセスである。これは、高次の成長段階が、そのまえの成長段階において構築された基盤のうえに存立しているということである。そして、これは、必然的に、人間意識の段階的発達において、段階をバイパスすることができないことを意味する。確かに、人間はトランスパーソナル段階へと成長する潜在能力を内蔵しているが、しかし、そうした段階へと到達することができるまえに、まず、その基盤であるパーソナル段階における成長が達成されなければならないのである。

こうした実際の人間成長についての認識のもと、トランスパーソナル研究は、第2段階では、トランスパーソナル体験の「段階」(stage)としての要素に注目をするようになった。結果として、この段階では、トランスパーソナル段階への構造的成長を可能にする集中的・継続的な実践の重要性が強調されることになる。東洋から合衆国に流入した多数の宗教家の指導のもと、トランスパーソナリストたちは、自ら「修行生活」に取り組むことをとおして、持続可能な構造的な意識変容を志向したのである。

「状態」としてのトランスパーソナル体験は、必ず「始まり」と「終わり」のある刹那的な体験である。第2段階では、そうした日常と対極化されたものとしての非日常性を追求するのではなく、むしろ、日常と非日常という乖離を「構築」してしまう自らの認知能力の限界をのりこえるための方法として、集中的・継続的な実践が擁護されたのである。「状態」としてのトランスパーソナル体験が「非日常的」なものとして経験されるのは、あくまでも、存在する意識構造がそれを「日常的」なものとして経験するための成熟段階に到達していないからにほかならない。こうした「日常」と「非日常」の乖離をのりこえるためには、そうした乖離を創造する意識構造をトランスパーソナル段階へと成長させることが必要となるのである。

しかし、トランスパーソナル段階へと構造的な成長を達成することは、必ずしも簡単なことではない。例えば、Robert Kegan (1994) は、先進国においても、人口の70~80%は、完全にはパーソナル段階(合理性段階)に到達しないと報告している。トランスパーソナル段階が、合理性段階よりもさらに高次の段階であるヴィジョン・ロジック段階が構築されたうえではじめて成立しえるものであることを考慮すると、実際には、人間の意識深化のプロセスがトランスパーソナル段階に到達することがいかに困難であるかが理解できるだろう。

しかし、トランスパーソナル段階への成長が困難なものであるという現実は、

決して、トランスパーソナル体験というものを「状態」としてのみとらえるべきだということを意味しない。むしろ、それは、その困難な課題をいかにして克服することができるのかについて真摯に探求をするようにトランスパーソナリストたちを鼓舞するものであったのである。実際、この段階における発想にもとづいて活動を展開しているトランスパーソナリストたちにとって、まず、自ら修行活動に取り組むことは、トランスパーソナリストとして、必須の条件と見なされている。

しかし、こうした段階的成長を重視する姿勢は、ひとつの思想運動として社会的に広範囲に展開しようとしていくうえでは、障害となる。確かに、人間は、普遍的に、トランスパーソナル段階へと成長する潜在能力を内蔵している。しかし、そうした段階の基盤となるパーソナル段階における成熟そのものが、発達心理学の調査が証明するように、実際にはたいへん困難なものであるという事実は、結果的に、トランスパーソナル段階への成長を、ほとんどのひとびとにとって、全く実現性をもたないものとしてしまう。皮肉なことに、トランスパーソナル思想は、研究者による科学的調査の結果を尊重しようとするほど、自らの思想運動としての発展の可能性を封殺することになってしまったのである。トランスパーソナル思想は、この段階においては、こうしたジレンマを解決するための効果的な方途を見いだすことができず、発足時にくらべて、その活気が徐々に減退していくのを看過することになる。³

第3段階

第3段階は、こうしたトランスパーソナル思想の行き詰まりをのりこえるために生まれた。ロスバークは、この段階を統合的（「インテグラル」もしくは「インテグレイティヴ」）段階とよんでいるが、これは、人間存在についての信頼性のある科学的調査の結果を尊重しながら、尚、一般社会との関係を構築していこうとする姿勢を象徴するものであるといえるだろう。

こうした統合的段階は、普通、ケン・ウィルバーの1995年の著作“*Sex, Ecology, Spirituality: The spirit of evolution*”の出版を契機として開始されたものとして認識されている。もちろん、トランスパーソナル思想が行き詰まりに直面していることを、賢明なトランスパーソナリストたちは、この著作の出版のまえから、すでに認識していたが、しかし、また、そうした危機感の解決に寄与することのできる真に説得力のある包括的構想を構築することに失敗してきたことも事実である。その意味で、この著作を、トランスパーソナル・コミュニティのなかに醸成させていた新段階を志向する機運にはじめて形をあたえた記念碑的な著作として認識することは妥当なことであろう。

統合的段階において実施されている作業を簡潔にまとめるとすれば、それは、人間存在のすべての領域を統合する作業ということができるだろう。それは、内面と外面、そして、個人と集合という、人間の経験するすべての重要領域を包括的に視野にいれたうえで、トランスパーソナルを実践思想として展開させていく作業といえる。これは、たいへん重要なことなので、もうすこし詳しく説明をくわえることにする。

あらゆる思想がそうであるように、トランスパーソナル思想もまた歴史との対話をとおして変容しつづけることを宿命づけられている。殊に、今日のように、社会のあらゆる領域において、人間をとりかこむ状況がめまぐるしく変化する時代においては、そうした責務に積極的に応えていくことは、とりわけ重要なこととなる。

トランスパーソナル運動は、1960年代にその当時の支配的思想として世界に君臨していた大量消費主義に対抗する、いわゆるカウンター・カルチャー運動として発祥した。そこでは、市場からとめどなく吐きだされてくる商品の受動的な消費をとおしては決して経験することのできない、人間の内面性の深部から立ちあがるよろこびが真の充足への王道として追求されたのである。

しかし、しばしば指摘されるように、そうした運動が、大量消費主義文明のありかたに対してすぐれた批判を投げかけるものであったとともに、実際には、そうした批判の対象であるメインストリーム社会への依存のうえに成立していたことも紛れもない事実である。つまり、リチャード・ハインバーグ（2004）の指摘するように、そうした運動は、基本的に、メインストリーム社会の保障する物質的な豊かさを前提としたうえで活動を展開する、依存の体質を温存した営みでありつづけたのである。こうした状況においては、トランスパーソナリストたちによるころみは、メインストリーム社会のありかたを変革しえるだけの実際的な影響力をもつことはできず、最終的には、閉塞した領域における、きわめて個人的な営みとして存在するだけのものに留まらざるをえなかった。

また、こうした内面性探求の閉塞化の流れは、無限成長を根本原則とする大量消費型資本主義の正当性を「証明」することになる東西帝国間の冷戦の終焉をとおして、さらに深刻化することになる。冷戦終焉後の高揚感のなかでは、人類を核兵器の応酬による絶滅の危機から救出した思想を批判することそのものがひどく憚られたのである。第二次世界大戦後に合衆国の主導のもとに出現した大量消費型社会の構造的問題に対する批判のころみとして自己を意味づけてきたトランスパーソナル運動は、このとき、自らの存在意義を喪失したのである。

1990年代にはいり、トランスパーソナル運動の衰退ということが言われるようになる背景に、このような歴史的状況が存在していたことは、まずまちがいないだろう。つまり、20世紀後半における劇的な時代の流れのなかで、内面性の探索というこの思想の核を構成する営みが、現代文明のありかたに対する批判という社会的な意義を喪失したとき、トランスパーソナル思想は、時代にひらかれた実践思想としての生命を終えたかのように思われたのである。

しかし、21世紀にはいり、大量消費型資本主義が人類社会の組織原理としてグローバル化される過程において、その破壊的特質が明らかになるなかで、トランスパーソナル思想はあらためて自らの実践思想としての存在意義を発見するための時期を迎えている。これまで、この運動の存在を革新的なものとして意味づけるために（密かに）必要とされてきたメインストリーム社会そのものがもはや維持不可能であることが明らかになりつつある今日の状況のなかでは、もはや、単純な対抗の思想として自らを意味づける「贅沢」はトランスパ

パーソナル・コミュニティにはあたえられていない。メインストリームとカウンター・カルチャーという境界そのものが解消しつつある時代のなかで、ただひとつ価値を持ちえるのは、最終的には、この瞬間にわれわれ人類が直面している問題について惑星的な視野から真に説得力のある解決のための構想を示すことだけである。

これまでの探求をとおして、トランスパーソナリストたちは、人間というものが常に関係性のなかで存在していることを確認してきた。意識の深化というたいへん個人的な営みも、実際には、自己の存在の内部から立ちあがる「こころの声」だけでなく、個人をとりまく諸々の環境的な条件にも強く影響されるものである。その意味では、この惑星の生命維持機構そのものが崩壊しようとしている今日において、意識変容という、これまでは内的なこころみとして存続していたものが、積極的に社会的な課題に取り組むようになるのは、ごく自然なことであるといえるだろう。このような時代において、それは、真に包括的な視座から自己の成長に取り組もうとする限り、もはや避けられないことなのである。

第3段階において、トランスパーソナル思想は、こうした問題意識のもと、真の意味で統合的な研究活動を展開するべく建設的な作業を開始している。また、こうしたとりくみのなかで、必然的に、トランスパーソナル思想の重要要素である「実践」についての認識も変化している。

超越と継承 (transcend and include)

上記のように、トランスパーソナル研究は、各発展段階において、特徴的な実践のありかたを提唱してきた。第1段階では、「状態」としてのトランスパーソナル体験が着目されたため、こうした状態を醸成する化学物質等の使用をとして、非日常的な意識状態を醸成することが実践のありかたとして抱擁された。第2段階では、「段階」としてのトランスパーソナル体験が着目されたため、集中的・継続的な修行に取り組むことが実践のありかたとして抱擁された。そして、第3段階では、個人としての内面探求のみならず、そうした内面そのものを相互関係性のなかにあらしめる他領域における取り組みも、実践の重要な構成要素として抱擁されたのである。

ここで留意すべきことは、こうした段階的発展の過程において、必ず、先行する段階における重要な成果が継承されてきたことである。

いうまでもなく、第2段階において着目された「段階的成長」を実現するためには、第1段階において着目された「状態」としてのトランスパーソナル体験をくりかえして経験することが必要となる。それにより、最初は非日常的な体験として経験された「状態」が、徐々に日常意識の恒常的な要素となることができるのである。しかし、ここでは、「状態」の経験を至上の目的とする利他的態度が克服されていることは確認しておくべきであろう。むしろ、ここでは、「非日常」と「日常」の対極化が生みだす乖離を解消することにより、この世界をあらためて「聖化」(“re-enchant”) することに価値が置かれるのである (Tarnas, 1991)。

第3段階において着目されている内面と外面、そして、個人と集合という人間の重要領域を包含した「統合的変容」への実践は、そうした実践に取り組む個人の人格的成熟を基盤とするものである。そして、そのためには、第2段階において着目された「段階的成長」をそのひとつがある程度までは達成していることが必要となる。しかし、ここでは、個人として高度の段階的成長を達成することを至上の目的とする態度が克服されていることは確認しておくべきであろう。むしろ、ここでは、個人としての充実の基盤のうえに生成する奉仕の精神の表現に価値が置かれるのである。

インテグラル段階における実践

インテグラル段階における実践のありかたについては、すでに、関係者によりいくつかの具体例が提唱されている。これらの具体的な実践法を総称する名称として、ここでは、インテグラル段階における理論的・実践的な活動を牽引しているインテグラル・インスティテュート (<http://www.integralinstitute.org/>) にならい、「統合的変容のための実践」(Integral Transformative Practice・ITP)を使用することにする。この名称の意味することは、下記のようにまとめることができる。

ここでは、「統合的」(integral)という言葉は、インテグラル段階における実践が、人間の体験のすべての領域における活動に取り組むことの重要性を認識するものであることをあらわすために使用されている。つまり、人間は、身体(body)・こころ(Mind/Heart)・魂(Soul)・霊(Spirit)という複数の領域を内包する存在であるという前提のもと(Leonard & Murphy, 1995; Wilber, 1995)、インテグラル段階における実践は、これらすべての領域における健康を志向するものであることを意味するのである。

「変容」(transformative)という言葉は、インテグラル段階における実践が、窮極的に、人間の構造的成長(変容)を志向するものであることをあらわすために使用されている。発達心理学者たちが指摘するように(Kegan & Lahey, 2001; Wilber, 1999)、人間意識の成長には、大別して2種類のものがある。ひとつは、既存の意思構造のなかで、より高度の調和や成熟を実現する成長(“translation”)。もうひとつは、段階的により高度の意識構造を構築することによりもたらされる成長(“transformation”)。いうまでもなく、人間の統合的な意識成長にとり、このどちらも必要なものであり、また、実際に、インテグラル段階における実践は、状況と必要を尊重しながら、この2種類の成長を促進することを志向する。しかし、同時に、インテグラル段階における実践は、後者の成長が、個人の意味創造構造(“meaning-making structure”) (Kegan, 1982, 1994)の根本的な解体と再構築を迫る、人間の本質的な変容であることを認識する。こうした認識のもと、それは、この構造的成長(変容)を可能とすることを志向するのである。

「実践」(practice)という言葉は、インテグラル段階における実践が、人間の成長というものが、常に、意図的・継続的な活動を通じて実現されるものであることを認識することをあらわすために使用されている。トランスパーソナル

研究は、第2段階の停滞期において、研究活動としての基準の低下を看過したが、結果として、それは、刹那的な高揚状態を体験することを目的とした第1段階におけるありかたへの退行を肯定する状況を生来させた。その意味では、インテグラル段階における実践は、第1段階における問題の克服をとりわけ重視した第2段階の問題意識をあらためて継承するものであると理解することができるだろう。

トランスパーソナル段階への成長が困難なものであるという現実は、決して、トランスパーソナル体験というものを「状態」としてのみとらえるべきだということの意味しない。むしろ、それは、段階的成長という困難な課題を完遂するための方法を探求するという課題をトランスパーソナリストに突きつけるものである。「統合的変容のための実践」は、刹那的な高揚状態のなかで知覚された可能性を自らの持続的な能力として体現するために必要となる段階的成長を完遂するための方法として、この課題に応えるために提唱されたのである。

3種類の「統合的変容のための実践」

しかし、「統合的変容のための実践」がインテグラル段階における実践として正当性を確立することができるためには、第2段階における段階的成長を重視する姿勢を継承するだけでなく、斬新な要素をくわえることをとおして、実践というものの「ありかた」を画期的に発展させるものでなければならぬ。実際、「統合的変容のための実践」がインテグラル段階における実践として認識されはじめているのは、こうした要素がもたらした、実践の領域の拡大によるものであるといえる。具体的には、それは、「統合的変容のための実践」が、個人（1人称）の領域のみならず、主観的關係（2人称）と客観的關係（3人称）の領域における変容をも実践上の課題として明確に抱擁したということの意味する（Torbert, et al., 2004）。つまり、これは、ウィルバーが識別した人間経験の主要な三領域（I・we・its）を網羅する包括的なものとしてインテグラル段階における実践が定義されたということである（Wilber, 1995）。つまり、インテグラル段階における実践が「統合的」なものであるということの意味は、人間経験の領域を垂直的に統合（身体・こころ・魂・霊の統合）するということだけでなく、水平的にも統合（1人称・2人称・3人称の統合）するということなのである。

統合的変容のための実践（1人称）

多くのトランスパーソナリストにとり、個人（“I”）の領域における実践（1人称のITP）は、最も理解しやすいものであろう。これは、個人が自らの成長のために、主体的に自己の状況にふさわしい統合的実践法をデザインして、それを継続的に実施していくことを意味する。人間存在の重要な構成要素（身体・こころ・魂・霊）のすべてに働きかけていくという発想法は、トランスパーソナル研究の第2段階における代表的研究（例えば、Murphy, 1993; Wilber, 1986）において、すでに具体的な方法論としてまとめられており、また、実際、今日

まで、世界各国において、多数のトランスパーソナリストにより実践されている（Ferrer, 2004; Leonard & Murphy, 1995）。また、インテグラル・インスティテュートにおいて開催されている5日間の実践講座（“Integral Life Practice”）は、1人称のITPの実践のこころみとして、最も実験精神に富んだものといえるだろう。

統合的変容のための実践（2人称）

主観的關係（“we”）の領域における実践（2人称のITP）は、実際の個人と個人の対人関係における変容への実践である。これは、目前に展開する人間関係に建設的に参加することをとおして、関係性の構築・維持・発展に寄与しようとするこころみである。具体的には、こうした2人称のITPは、例えば、共同体における討議活動を建設的に行うための具体的な技法としてまとめられている（Torbert, et al., 2004）。とりわけ、関係者間に見解の相違が存在するときに、相互の関係を悪化させることなく、意見の同意を形成することをめざす、建設的な対話能力は、今日において、自己成長という観点のみならず、社会活動に参加するために、すべての成人が必要とされている能力である。ただ、ここで留意すべきことは、統合的変容のための実践においては、こうした対話の技法は、常に、1人称の実践との関係においてとらえられていることである。確かに、2人称のITPとして認知されている技法には、個人としての人格的成熟のうらづけなしに、あくまでも「技術」（techniques）として習得できるものもある。しかし、そうした条件のもとでは、それらの技法は、自己中心的な動機を基盤として利用されることならざるをえず、結果として、十分に有効性を発揮することはできない。基本的に、2人称のITPは、継続的な1人称のITPの実践にもとづいて成立するものなのである。

統合的変容のための実践（3人称）

客観的關係（“its”）の領域における実践（3人称のITP）は、同時代を共有する人間との関係における変容への実践である。これは、普通、同時代の人間が共有する社会構造の変革という政治的な取り組みとして表現される。あくまでも目前の人間関係に建設的に参加することを主眼として2人称のITPと比較して、3人称のITPの観点は、より大規模のもので、そこで獲得される成果は、時として、同時代の人間のみならず、次世代の人間の福利にも影響をあたえることになる。また、環境保護活動のように、人間のみならず、この惑星を共有する他の生物種の福利にも直截の影響をあたえるものもある。

多数の調査研究が証明するように、今日、大量消費主義を基盤とする人類の経済活動は、この惑星の生命維持機構そのものが崩壊しようとしている（例えば、Daly & Cobb, 1989/1994; Worldwatch Institute, 2001, 2002, 2003, 2004, 2005）。そうした時代の危機に対応するために、多数のひとびとが、積極的に活動を展開している。しかし、また、それらの惑星的規模の問題のあまりの巨大さと深刻さゆえに、たくさんの活動家が、絶望等の内的危機を経験している（Lifton,

1993)。また、それらの惑星的規模の問題に対応するための活動は、しばしば、多様な文化背景をもつひとびとの共同作業を必要とするが、関係者が文化的差異をのりこえて共同作業をする意思疎通の技術をもたないために、そうした活動は、しばしば、人間関係上の軋轢に蝕まれることになり、目標を達成することに失敗する。このように、3人称のITPは、こうした大規模の課題・問題に取り組むうえで必要とされる1人称の領域における成熟（例：自己管理能力）と2人称の領域における成熟（例：建設的な交渉能力）を前提として成立する営みなのである。

重心の移行

これら3種類の実践に継続的に取り組むことそのものが、インテグラル段階における実践の目的となる。しかし、上述したように、普通、実践は、1人称→2人称→3人称の順序で、段階的にその重心（“the center of gravity”）を移行させていく。人間の人格的な成熟は、徐々に他者の福利に積極的に寄与したいという意欲を醸成するが、そうした奉仕への意欲が「最高の関心」（“the ultimate concern”）として確立されるまえに、個人は、まず自らの成長に主体的に取り組むことをとおして、自らの「癒し」を経験しなければならない（一般的に、奉仕への意欲が個人の内発的な「行動論理」（“action logic”）として確立するのは、パーソナル段階の最終段階であるヴィジョン・ロジック段階である）（Torbert, et al., 2004）。また、こうした重心の移行は、年齢を重ねるなかで、個人の社会的な影響力が増すことが必然的にもたらす外的圧力（生存状況）によってひきおこされるものでもある。共同体の参加者として他者の福利を考慮しながら行動することを要求される立場に置かれることにより、個人は、1人称のみならず、2人称と3人称の統合的実践に積極的に取り組むことを期待されるようになるのである。

ただ、ここで留意すべきことは、ここでとりあげられているのが、あくまでも実践の重心であるということである。普通、実践は、その重心を1人称→2人称→3人称の順序で段階的に移行させていくことになるが、それは、決して、ある段階に実践の重心があるとき、他段階の実践を無視するということを意味するものではない。個人が自らの統合的変容への実践をデザインするにあたり、可能な限り1人称・2人称・3人称の各要素を包含するようにこころがけることは、常に重要である。また、実際、人生のあらゆる瞬間において、人間は、1人称・2人称・3人称という人間経験の主要な三領域を経験しながら、存在しているのであり、それゆえに、構造的に、これらの領域を取捨選択して生きることができないのである。人生をとおして、人間は、好むと好まざるにかかわらず、それらの領域において責任能力（response-ability）を発揮して、生きていかざるをえないのである。ここで「重心の移行」という言葉で意味されているのは、むしろ、そうした各要素を統合することを意識的にこころがけるという前提のうえで、実際に、その瞬間において、個人が、それらの要素を統合している、その根本的な「ありかた」（orientation）なのである。

ある意味で、実践の重心とは、個人の構造的成熟度を率直に表現するもので

あり、個人の意識的な操作により、簡単に移行することのできるものではない。しかし、また、実践の重心は、個人が自らの直面する生存状況が突きつける要求に応えようとするなかで、確立されるものでもある。それは、いわば、内的力と外的力が相互作用をするなかで、個人の存在に均衡 (equilibrium) を構築するとき、その個人の成長衝動の実現の全体的な方向性として生まれるものと理解することができるだろう。

例えば、3人称的な実践を求める外的な要求がどれほど強くても、個人が、そうした要求に対応するための構造的成熟度を有していなければ——過度の内的な乖離を回避しようとするのであれば——実践の重心は、1人称、または、2人称の領域に確立されることになるだろう。逆に、個人の構造的成熟度がすでに3人称の実践を重心とするための段階に達していても、実際に3人称的な活動を実践するための機会が存在していなければ、その個人の重心は、3人称には確立されないだろう。

インテグラル段階における実践は、個人が、自らの統合的変容のために責任をもつことを強調する (Leonard & Murphy, 1995)。窮極的には、自らの成熟のために、どのような実践が必要とされているのかということ判断するのは、この世界において、その個人しかいないのである。その意味で、指導者に半ば盲目的に従うことが強調された過去とくらべて、今日において、個人の責任——自らの判断にもとづいて、自らの成長を実現していく責任、そして、その結果を受容する責任——は、大きく増加している。

人間が、瞬間・瞬間という人生の部分 (parts) を完全に生きることができるためには、人生という全体 (whole) を意識のなかに把握することができなければならない (Morin, 2001)。つまり、個人が、人生のあらゆる瞬間において、そこに完全に「ある」ことができるためには、同時に、人生を俯瞰する大局的構想を意識のなかに保持しつづけることができなければならないのである。インテグラル段階においてトランスパーソナリストに要求されている高度の責任能力は、必然的に、自己の実践活動が長期的にどのように質的变化を遂げることになるのかを照明する大局的構想を必要とする。「重心の移行」という言葉で表現されているのは、人生のなかで徐々に展開する実践の根本的な「ありかた」の変化なのである。

人間という小宇宙 (micro-cosmos) と世界という大宇宙 (macro-cosmos) を有機的な関係性のなかにとらえようとするトランスパーソナル思想は、こうした部分 (parts) と全体 (whole) とのあいだに存在する相互性を尊重しようとする発想を体現するものである。インテグラル段階においては、トランスパーソナリストは、こうした発想を思索活動においてのみならず、日常の実践のなかにおいても体現するように求められているのである。

具体的な活動としての実践

実践とは、いうまでもなく、具体的な活動をすることである。具体的な活動をとすることをおして、人間は、自らの潜在能力を実現する内的状態を一時的に創造 (enact) することができるのである (Wilber, 2002a; 2002b)。

こうした状態をくりかして経験することをとおして、最初は非日常的な状態体験として経験されていたものが、徐々に、日常的に持続性のある構造として確立されていく。このような成長の法則は、(外国語や楽器等) あらゆる技能の習得において、当てはまるものである。まず、その技能を習得するうえで必要とされる基礎を体得するために、先達により確立された「型」をくりかえして実行する。こうした活動をとおして、個人は、その技法を修得するということが意味する実際の内的状態を日常的に体験することができるようになるのである。

あまりにも浅薄に「個性の尊重」を謳う現代の風潮は、おうおうにして、「型」を倣うことが、個人の個性を抑圧することにつながるという錯覚をもたらす非常に深刻な危険性を内包している。しかし、人間の潜在能力とは、基本的に、確立された「型」を実行する過程のなかで、自己のなかに新しく醸成される内的現実として実現されるものである。それは、いわば、われわれが自らの個性として執着するものを「型」を実践する作業のなかで放棄することをとおして、そこに予期しない体験が立ちあがることを許容する作業のなかに生成するものということができるだろう。

ウィルバー (Wilber, 1999; 2000a) が指摘するように、現代における「スピリチュアリティ」とは、総じて、こうした自己の「個性」への執着を増幅させるイデオロギーへと劣化してしまっている。実際、現代において、「スピリチュアル」であるとは、「型」を実行する過程のなかで、自己を放棄・発見する、生産的姿勢を確立することではなく、むしろ、既存の「自己」を正当化するために都合のよいイデオロギーを貪る消費的姿勢を正当化することなのである。

「個」としてのアイデンティティーは、構造的に、自らの存在が確固 (substantive) としたものでないことを知覚しているために、そのことへの恐怖を内蔵している (Loy, 1996; Wilber, 1999)。現代の「スピリチュアリティ」は、こうした恐怖に、そうした構造的問題の解決に取り組もうとすることなく、対処しようとする。つまり、それは、自らの存在が確固としたものであるという幻想を醸成しようとする、「個」の自己増幅のころみ (“the Atman project”) を「スピリチュアリティ」というイデオロギーを利用して援助しているだけなのである。

インテグラル段階における実践は、スピリチュアリティというものが置かれているこうした状況を打開するために、あらためて、具体的な活動としての実践の価値を強調する。具体的な活動をすることをとおして、人間は、自らの執着を放棄するための機会を自らにあたえることができる。成長への端緒とは、自己の潜在能力を内的現実として経験する瞬間に参加すること以外にはないのである (Ferrer, 2002)。

態度としての実践

具体的な活動としての実践が、実際に、個人の生活に真に建設的な効果をもたらすことができるためには、態度としての実践が必要になる。これは、日常生活のあらゆる瞬間を成長という人間存在の原目的を十全な「注意」

(mindfulness) をもって生きようとする、個人の基本的な態度ということなので

きるものである。

いうまでもなく、実践とは、必ずしも、具体的な活動に従事することだけを意味するのではない。それは、また、いかなる活動をするときにも、常に意識（存在）のなかに息づく基本的な態度でもなければならぬのである。

確かに、意識変容のための具体的な実践は、限定された時間のなかで、ある特殊な意識状態を醸成することを目的とする。しかし、こうした実践の内包するパラドクスは、そうした特殊な意識状態のなかで開示されものが、実際には、日常のあらゆる瞬間において「常に既に」(always already) 存在している事実であるということである。必然的に、こうした存在の事実は、具体的な活動としての実践に取り組んだから実現されるのではなく、存在することそのものが無条件に賦与している条件なのである。しかし、実際には、基本的な態度としての実践が欠如しているとき、こうした洞察は、具体的な活動としての実践が終了すると、すぐに忘却されてしまう。その意味で、態度としての実践は、具体的な活動としての実践の成果を日常の瞬間・瞬間に新鮮に息づくものとして統合するために、必須の基盤なのである。また、こうした基盤が存在していればこそ、日常の煩雑のなかで失われがちになる無条件に賦与されている存在の条件についての認識を蘇生するための具体的な活動をする必要性が認識されえるのである。

2 種類の実践の相補的価値

インテグラル段階における実践は、これら2種類の実践を相補的なものとして認識し、その両方を同時に体現することの重要性を強調する。これら2種類の実践を重視することの価値は、現代のスピリチュアリティをめぐる状況を鑑みると、とりわけ明確になるだろう。

上述のように、インテグラル段階における実践は、具体的な活動としての実践の価値を強調する。これは、具体的な活動が、非日常的な内的状態を醸成することをおして、人間を日常の意識状態の束縛から開放する効果を有してからである。こうした経験をすることをおして、人間は、日常の自己を対象化することができ、そして、新たな自己を創造するための探求作業を開始することができるのである。

しかし、自己を対象化することは、自らの存在の基盤を動揺させることでもあるために、それは、しばしば、実存的不安をもたらすことになる。その意味で、具体的な活動としての実践は、あくまでも既存の「自己」を確固としたものとして確立しようとする、人間の自己増幅のこころみを麻痺させる「危険」な取り組みといえるのである。

実際、多くの人々は、具体的な実践活動に取り組むことが内包する、こうした「危険性」を敏感に察知して、そうした活動に従事することを回避しようとする。しかし、こうした逃避は、自らはあくまでも成長という課題に真摯に取り組んでいるのだという自己イメージを溶解させる可能性を秘めている。彼らにとり、こうした自己イメージを保持することは重要な意味をもつために、自らが成長という過程において必須となる自己対象化の課題から逃避したことを

正当化することが必要となる。こうしたジレンマを、多くの人々は、実践というものを「態度」として定義することをとおして解決しようとする（これは、「態度としての実践」にさえ取り組んでいれば「活動としての実践」は必要ないという姿勢に結実する）。いうまでもなく、これは、自己保全のために言葉を弄することにほかならないが、実際には、現代においては、非常に頻繁に行われている行為でもある（Wilber, 2001）。こうした状況において、実践というものを、「態度としての実践」と「活動としての実践」という、ふたつの相補的な要素をもつものとして認識することは、こうして形骸化してしまった現代人の自己変容への取り組みをその本来のありかたへと恢復することを可能にするのである。

また、これらの要素は、“do”と“be”という、人間における2種類の主要な存在の方法（ways of being）を体現するものでもある。それらは、人間の存在に構造的なパラドクスをあたえることをとおして、人間に成長への「能力」を賦与する。つまり、こうしたパラドクスの存在は、人間の内部にそれを「解決」しようとするダイナミズムを醸成することをとおして、より高度な均衡（equilibrium）の確立をめざす深化のプロセスを促進するのである。

発達心理学は、成長とは、人間が問題を解決することではなく、問題が人間を解決することであるという。つまり、われわれは、パラドクスを解決しようところみるなかで、逆に、パラドクスに解決されるのである（Kegan & Lahey, 2001）。その意味では、人間において、成長とは、自らのなかにパラドクスを抱擁することをとおして、それがわれわれを解決するのを許容することなのである。

成長という人間の課題に意識的に取り組もうとする統合的変容への実践において、このような成長の法則を積極的に活用することが重要となるのはいうまでもないだろう。2種類の実践への取り組みは、このパラドクスの抱擁という人間成長の核心を構成する課題への意識的な取り組みを可能とするものなのである。

自己の成長への責任能力

統合的変容への実践を可能とする必須の条件は、自らの成長に対する責任能力（response-ability）である（Leonard & Murphy, 1995）。この能力を十全に発揮することをとおして、個人は、はじめて、自らの統合的成長を実現するための計画を構築し、また、修正することができるのである。

上述のように、人間の統合的成長は、複数の領域における変容への取り組みを必要とする、複雑なプロセスである。このことは、必然的に、個人に複数の指導者を自らの判断にもとづいて活用する能力を育成することを要求する。

過去においては、自己探求のために、自己を指導者にあけわたすことが必要なことであると信じられた。そうした要求を拒否することは、しばしば、「自己」への執着として非難されたのである。しかし、そうした要求を盲目的に受け入れることが無数の悲劇を生み出すことを（例えば、新興宗教団体における数々の悲惨な事例をとおして）痛感した現代人にとり、そうした態度は、もはや、

現実性をもたないものとなりはじめている。

いうまでもなく、ひとりの人間が、人間存在のすべての領域を修得することは不可能である。ある領域において、指導者として、他者の成長を促進することができるだけの能力を養うためには、膨大な訓練が必要とされる。このことは、今日において、あらゆる領域において、専門家となるために、われわれが履修しなければならない過酷な課程をみれば明らかであろう。自己を指導者にあけわたすことを美德とした過去の発想は、ひとりの人間が導師として他者の全存在を抱擁することができると思定した、人間存在の複雑性を無視した人間観を基盤とするものなのである。

インテグラル段階における実践は、こうした人間観の限界を認識したうえで、発想されるものである。それは、個人が自らの統合的変容に取り組むうえで複数の領域における探求をする際、それぞれの領域に熟練した複数の指導者を適宜に利用することを奨励するのである。

もちろん、このことは、必然的に、成長という過酷な試練を回避しようとする人間存在に息づく強力な衝動に自らの判断にもとづいて抗うことができるだけの強靱な自己否定能力を個人に要求するものである。過去においては、指導者の発言を絶対的なものとして受容することをおして、個人は、こうした能力を育成することなく、自己探求の作業に取り組むことができたかもしれない。しかし、そうした「贅沢」は、もはや、現代人にはあたえられていないのである。

ただ、ここで留意すべきことは、指導者を適宜に利用するとは、決して、われわれの自尊心を擽る指導者を選択的に「消費」するということではないということである。実際、スピリチュアリティの商品化が完成した現代においては、そうした甘言をあたえてくれる「指導者」は無数にいるので、そうした「商品」を次々と利用することは簡単なことである。むしろ、ここで「指導者を適宜に利用する」という言葉で意味されているのは、人間存在を構造的に呪縛するそうした自己保全的なありかたを独力では克服することができないことを認識するときに成立する成熟した能力である。そうした能力があればこそ、個人は、真の意味で、自らの必要としている援助を認識することができ、また、指導者の過酷な要求に主体的に自らをあけわたすことができるのである。インテグラル段階における実践とは、その意味では、他者を必要とすることを痛切に認識しえる、成熟した自己認識能力を基盤とするものであるということができるだろう。統合的変容のための計画と修正は、こうした自己認識を基盤として、構築されえるものである。

自らの成長に対する責任能力とは、真の意味で自らが必要としているものを探求しつづけていく「開かれた」態度である。統合的変容への実践に取り組むうえで、自らが希求する将来像を明確にして、それを実現するための実践計画を立てることは、自己の意識を凝集して、絶えず情熱をよびおこすために重要となる。自らが真に希求するものを明確にすることは、自らのなかに潜在する能力を実現するために大きな価値をもつのである (Leonard & Murphy, 1995)。しかし、ここで留意すべきことは、こうした計画が、時として、個人が真に取り組まなければならない課題を覆い隠すかたちで構築される可能性を秘めて

いることである。人間の構築するあらゆる構想（計画）が、常に、現実のある領域を排除することをおして成立するものであることを考慮すれば（Daly & Cobb, 1989/1994）、それは、いたしかたのないことかもしれない。しかし、自己変容への実践において、自らの視点が構造的に内蔵する盲点を積極的に探求しつづけることは、とりわけ重要なことになる。

実践への取り組みは、常に、実践の主体である自己（“I”）そのものを変容しつづける。結果として、それは、その実践の計画を構想したときに存在していた自己の視野の限界を克服する新しい視野をもたらすことになる。そうしたときに、過去において構想された計画が修正されるのは、自然なことであるだけでなく、むしろ、必然のことであるといえるだろう。その意味では、自らの統合的成長を実現するための実践計画を継続的に修正することができることそのものが、自己変容の実践においては、必要（integral）な構成要素であるということができるだろう。

実践計画構築のための方法

最後に、統合的変容のための実践計画を構築するための具体的な方法を簡潔に紹介する。これは、インテグラル・インスティテュート

（<http://www.integralinstitute.org/home.html>）やインターコネクションズ

（<http://ikan.biz/en/quadrant.html>）等の国内外の組織においてこころみられている、インテグラル思想を基盤とした先駆的な取り組みを参考にしたものである。

将来像の創造

統合的変容のための実践は、継続的な実践をとおして、自己の変容を志向する真摯な取り組みである。こうした取り組みにコミットするうえで、あらゆるそうした取り組みにおいてそうであるように、自らが希求する将来像を構築することがたいへん重要になる。こうした将来像は、自らが創造したいと希求する内的・外的な「状態」をまとめたものである。上述したように、こうした将来像を明確化することをおして、われわれは、日常生活に方向性をあたえることができ、そして、それをおして、自らの意識を凝集して、絶えず情熱をよびおこすことができるのである。自らが真に希求するものを明確にすることは、自己のなかに潜在する能力を実現するために必要な作業であることが強調される。ただ、ここで注意すべきことは、将来像が、野心的なものであるのは結構だが、現実性にねざしたものである必要があるということである。

現状確認

次に、現在、自らが取り組んでいる実践を確認する。まず、現在、自らが定期的に取り組んでいる実践をリストする。⁴そして、それらのなかで、最も効果と価値があると見なせる実践を明確化する。それらは、普通、今後の実践活動の構成要素として、継続して実践されるものとなる。ただ、それらの実践が

継続する価値のあるものであるかどうかを検討するとき、それらが最初に明確化した将来像を実現するために重要なものであることを確認する必要となる。

インバランスの明確化

現在の実践が把握できたら、そのなかに存在しているインバランスを明確化する。この活動のねらいは、現在の実践活動において、無視されている領域や強調されすぎている領域を認識することである。典型的なインバランスとしては、例えば、下記のようなものをあげることができるだろう。

- ❖ 瞑想に集中的に取り組んでいるひとは、しばしば、運動等の身体活動を軽視しがちになる。こうしたひとは、例えば、定期的なウエイトリフティングが推奨される。
- ❖ 心理カウンセラーとして「パーソナル領域」の問題・課題に集中的に取り組んでいるひとは、「トランスパーソナル」領域の活動にも取り組むことが推奨される。
- ❖ 1人称（個人の領域における成長）ばかりに取り組んでいる人には、実践の重心を2人称（主観的關係性の領域における成長）や3人称（客観的關係性の領域における成長）に移行することが推奨される。
- ❖ 他者に奉仕することが強調されすぎているひとは、実践の重心を自己の内面に対する洞察を育成する活動に移行することが推奨される。

インバランスが明確化されたら、あらためて最初にまとめた将来像をふりかえり、必要に応じて、インバランスを解消することができるよう、将来像を書きなおす。時として、われわれは、自分でも気づかないうちに、将来像を自己の現状が内包するインバランスを助長するかたちでまとめてしまう。この作業は、そうした危険性を回避するためのものである。

新しい実践活動の付けくわえ

統合的変容への実践は、刹那的な高揚状態ではなく、段階的変容——すなわち、長期的に持続可能な成長——を志向する取り組みである。そして、そうした取り組みは、必然的に、献身的な実践を必要とする。このことは、新しい実践を付けくわえるにあたり、現実的な可能性（意欲・時間）を考慮して、ほんとうに長期的に取り組むことのできる実践を選択することが重要となることを意味する。つまり、現在の生活において、実際に自らにあたえられている時間を考慮しながら、永続的なライフスタイルの構成要素として現実的に継続できると思われるものを選択することが必要となるということである。

いうまでもなく、たくさんの実践に取り組むことは必ずしも重要ではない。少ないものでも、それが献身と誠意をもって取り組むことのできるものであるなら、たくさんものに取り組むよりも、効果があるのである。

長期的に取り組むことのできる実践とは、基本的に、われわれが実践のプロ

セスそのものを楽しむことのできるものである。従って、新しい実践を付けくわえるにあたり、そうした喜び (enjoyment) を体験できると期待できる実践を選択することが大切となる。また、実践を選択するにあたり、自らのパーソナリティ・スタイルを考慮することも重要となる (すべての実践は、必ずしも、すべてのスタイルに効果的であるとは限らない)。

いずれにしても、実践を選択するにあたり、窮極的には、われわれが自己にとり最も価値があると判断するものを選択することが重要となる。その実践について確信がもてないときには、実験的に一月ほど取り組んでみることを推奨されよう。

共同体の構築

統合的変容への実践は、個人と集合という実践活動の重要要素を尊重しようとするところみである。こうした姿勢は、実践活動の構成要素として、実践の共同体を構築 (発足・維持・発展) する活動が明記されていることにも反映されている。

上述のように、統合的変容への実践は、1人称→2人称→3人称の順序で、その重心を段階的に移行させていくが、実際には、それらの要素 (1人称・2人称・3人称) は、人間存在の本質的な体験領域として、すべて段階において存在しているものである。その意味で、統合的変容への実践は、人間存在の本質的な体験領域の可能性を意識的に探求することをとおして、われわれに人間としてあることの可能性を包括的に抱擁することを可能とするところみであるといえるだろう。そして、こうしたねらいを実現するための活動が、実践の共同体の構築活動なのである。

こうした共同体の構築活動の基盤となるのが、慈愛の精神にもとづいた、対話の実践である。統合的変容への実践における対話とは、他者を受容することであるのみならず、また、自己を受容することでもある。ここでは、他者を傾聴することをとおして、まず、他者をありのままに受けとめる作業を実践する。同時に、そうした作業をとおして自らのなかに沸きあがる経験を傾聴し、それを他者に表現する。参加者は、相互の存在を受容する過程のなかで、常に、自己の内部に立ちあがる真実を尊重して、そして、そこから他者に携わることを求められるのである (Oka, n. a.)。参加者ひとりひとりが、そこで生成する自らの体験に真実 (authentic) であろうとすることをとおして、対話を、情報と情報の交換の空間ではなく、人格と人格のであい (encounter) の空間として構築するのである。それは、ひとりひとりが自己の体験の絶対性を肯定することを許容する、相互性 (mutuality) の精神に貫かれた関係性を構築しようとするところみであるといえるだろう。

自己理解と他者理解は、常に、相補的に作用するものである (Torbert, et al., 2004)。そして、統合的変容の実践は、この相補的な作用を醸成する関係性という神秘的な人間体験の可能性を積極的に探求するところみである。実践の重心の段階的発展は、こうした探求に内在する喜びに導かれるものであるということもできるだろう。

まとめ

代表的なトランスパーソナリストたちの指摘するように、(例えば、Bache, 2000; Griffin, 1989; Wilber, 2002a, 2002b)、自己変容の実践活動のなかで個人が直面する苦悩は、その本質において、人類種として人類が抱えている試練が顕現したものである。それらの苦悩を自らのものとして抱擁し、そして、その解決のために取り組むことは、自らのいやしのみならず、種のいやしに貢献することであるとこれらのトランスパーソナリストたちは主張する。その意味で、自己変容に取り組むとは、窮極的に、個人が、人類種の構成員として、ひとつの時代に生まれあわせることをとおして、自らに「宿命」(destiny)として突きつけられる集合的な課題の解決に取り組む奉仕の作業であるということができるだろう。

現在、先駆的なトランスパーソナリストにより主張されているトランスパーソナル研究の新しいありかたは、人類が、今日、未曾有の危機に直面している事実の認識にもとづいて構想されているものであることは、まず間違いないだろう(例えば、Bache, 2000; Elgin, 2000; Griffin, 2004, 2005)。しかし、こうしたありかたが、先駆的なものでありながら、同時に、発足の瞬間から、トランスパーソナルというところみに常に息づいていた本質を体現するものであることをわれわれはここで確認するべきであろう。

トランスパーソナルという言葉は、「個」(パーソナル)を超えるという意味をもつものであるが、そこには、総じて、垂直的と水平的というふたつの方向性の意識変容のありかたが示唆されている。人間は、垂直的な意識変容をとおして、意識の深層領域を認識し、そして、水平的な意識拡張をとおして、同時代をともにする生命とのつながりを認識する。トランスパーソナルという思想を实践していくにあたり、このふたつの要素の価値を認識し、そして、それらを統合していくことは、たいへん重要なことであるといえる。真の意味でトランスパーソナル思想を实践するにあたり、われわれは、「魂」や「霊」といわれる深層領域を探求できるだけでなく、時代が突きつける現実を直視し、協調してそこに存在する困難をのりこえていく努力をしていかなければならないのである。

現代という危機の時代において、トランスパーソナル思想を实践するにあたり、果たしてどのようなかたちでこの課題に取り組んでいくことができるのか——こうした課題と真摯に取り組んでいくうえで、現在、インテグラル段階におけるトランスパーソナル研究の構想として提唱されている実践の方法論は、そうした問いに対するひとつの真摯な解答といえるだろう。これからのわれわれの課題は、こうした解答を自ら生きていくことをとおして、その発展に寄与することなのである。

参考文献

- Bache, Christopher (2000). *Dark night, early dawn: Steps to a deep ecology of mind*. Albany: State University of New York Press.
- Cook-Greuter, Suzanne (1999/2000). *Postautonomous ego development: A study of its nature and measurement*. (Available from Cook-Greuter@post.harvard.edu)
- Cortright, Brant (1997). *Psychotherapy and Spirit: Theory and practice in transpersonal psychotherapy*. State University of New York.
- Daly, Herman, & Cobb, John. (1989/1994). *For the common good: Redirecting the economy toward community, the environment, and a sustainable future*. Boston: Beacon Press.
- Elgin, Duane (2000). *Promise ahead: A vision of hope and action for humanity's future*. New York: HarperCollins.
- Ferrer, Jorge N. (2002). *Revisoning transpersonal theory: A participatory vision of human spirituality*. Albany: State University of New York Press.
- Ferrer, Jorge N. (2004). Integral transformative practice: A participatory perspective. Available at <http://www.integralworld.net/ferrer.html>
- Griffin, David Ray (1989). *God and religion in the postmodern world: Essays in postmodern theology*. Albany: State University of New York Press.
- Griffin, David Ray (2004). *The new Pearl Harbor: Disturbing questions about the Bush administration and 9/11*. Northampton, MA: Olive Branch Press.
- Griffin, David Ray (2005). *The 9/11 commission report: Omissions and distortions*. Northampton, MA: Olive Branch Press.
- Heinberg, Richard (2003). *The party's over: Oil, war, and the fate of industrial civilization*. Gabriola Island, Canada: New Society.
- Heinberg, Richard (2004). MuseLetter, No. 148, Boomers' last chance? Available at <http://www.museletter.com/archive/148.html>
- Kegan, Robert (1982). *The Evolving Self: Problem and Process in Human Development*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Kegan, Robert (1994). *In over our heads: The mental demands of modern life*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Kegan, Robert, & Lahey, Lisa Laskow (2001). *How the way we talk can change the way we work: Seven languages for transformation*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Leonard, George & Murphy, Michael (1995). *The Life We Are Given: A Long-Term Program for Realizing the Potential of Body, Mind, Heart, and Soul*. NY: Jeremy P. Tarcher.
- Lifton, Robert J. (1993). *The protean self: Human resilience in an age of fragmentation*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Loy, David (1996). *Lack and transcendence: The problem of death and life in psychotherapy, existentialism, and Buddhism*. Amherst, NY: Humanity Books.
- Morin, Edgar (2001). *Seven complex lessons in education for the future*. UNESCO.
- Murphy, Michael (1993). *The Future of the Body: Explorations into the Further Evolution of Human Nature*. NY: Jeremy P. Tarcher.
- Oka, Kenji (n. a.). Mindfulness Encounter Group. Available at

<http://www.maum.net/index.html>

Rothberg, Donald (1999). Transpersonal issues at the Millennium. *The Journal of Transpersonal Psychology*, Volume 31(1).

Tarnas, Richard (1991). *The passion of the Western mind: Understanding the ideas that have shaped our world view*. New York: Ballantine Books.

Torbert, Bill & Associates (2004). *Action inquiry: The secret of timely and transforming leadership*. San Francisco: Berrett-Koehler.

Trungpa, Chogyam (1973). *Cutting through spiritual materialism*. Boston: Shambhala

Wellings, Nigel (2002). Unexpected bedfellows, analytical and transpersonal psychotherapy. Available at http://www.contemplativeforum.co.uk/NW1_art.html

Wilber, Ken (1980). *The Atman project: A transpersonal view of human development*. Wheaton, Ill: The Theosophical Publishing House.

Wilber, Ken (1986). Treatment modalities. In Ken Wilber, Jack Engler, & Daniel P. Brown (Eds.), *Transformation of consciousness: Conventional and contemplative perspectives on development*. Boston: Shambhala.

Wilber, Ken (1995). *Sex, ecology, spirituality: The spirit of evolution*. Boston: Shambhala.

Wilber, Ken (1999). *One taste: The journal of Ken Wilber*. Boston: Shambhala.

Wilber, Ken (2000). *Integral psychology: Consciousness, spirit, psychology, therapy*. Boston: Shambhala.

Wilber, Ken (2000a). *A theory of everything: An integral theory for business, politics, science, and spirituality*. Boston: Shambhala.

Wilber, Ken (2000b). Appendix C: The death of psychology and the birth of the integral. Available at

http://wilber.shambhala.com/html/books/psych_model/psych_model8.cfm/

Wilber, Ken (2001). A spirituality that transforms. Available at <http://www.wie.org/j20/wilber.asp?ifr=srch>

Wilber, Ken (2002a). Excerpt A: An integral age at the leading edge. <http://wilber.shambhala.com/>

Wilber, Ken (2002b). Excerpt B: The many ways we touch: Three principles helpful for any integrative approach. <http://wilber.shambhala.com/>

Worldwatch Institute. (2001). *State of the world*. New York: W. W. Norton.

Worldwatch Institute. (2002). *State of the world*. New York: W. W. Norton.

Worldwatch Institute. (2003). *State of the world*. New York: W. W. Norton.

Worldwatch Institute. (2004). *State of the world*. New York: W. W. Norton.

Worldwatch Institute. (2005). *State of the world*. New York: W. W. Norton.

Notes

¹ 人間性心理学の基盤のうえに、展開された準備活動の結実として、the Journal of Transpersonal Psychologyが出版されたのは、1969年である。そこで中心的な役目を果たした人物として、Antony Sutich・Michael Murphy・Abraham Maslow・Stanislav Grof・Viktor Franklがあげられる (Wellings, 2002)。

² いうまでもなく、こうした特徴づけは、あくまでも、そのときそのときのトランスパーソナル研究の「重心」をまとめたものである。それぞれの段階において、常に、こうした特徴づけにあてはまらない例外が存在したことは、あらためて指摘するまでもないだろう。しかし、トランスパーソナル・コミュニティーが、ひとつの学術共同体として、これまでに、研究成果を共有し、そして、相互批判を基盤として向上しようとしてきたとすれば、そこには、必ず成長の根本法則である「超越と継承」のダイナミズムが息づいていたはずである。ロスバーグのモデルが、綿密な過去の調査にもとづき、この共同体に息づくそうした法則を浮かびあがらせるものであるという意味で、高く評価できるものであるといえる。

³ ウィルバー (2000b) の指摘するように、トランスパーソナル研究は、こうしたジレンマのもと、自らの視野を狭窄化するか、もしくは、研究基準を低下させることになった。

⁴ このときに、たとえば、インテグラル・インスティテュートの体験講座において指導されるように、それらの実践を「トランスパーソナル領域」・「パーソナル領域」・「身体領域」・「思想領域」、そして、「他領域」という項目を設定して、分類すると良いだろう。また、このとき、実践の頻度も明記しておく必要がある。